

報告書

2015.2.5 版

まもなく阪神淡路大震災から 20 年、東日本大震災から丸 4 年を迎えようとしています。私どもの加川プロジェクトは、東北の文化的復興を支援する市民活動の中から誕生しました。3.11 のカタストロフィと向かい合った加川さんの巨大絵画から、一つの総合芸術のプロジェクトが生まれました。今回はその 3 回目、神戸では多分、締めくくりのプロジェクトとなるでしょう。

いま私たちは「フクシマ」の現実と向かい合っています。この KIITO の大空間の中で、宮本さんの「福島第一原発神社」が加川さんの「フクシマ」と出会い、対話を始めています。いずれもメッセージ性の強い問題作です。日本と世界の 50 年後を真摯に問いかける強烈な作品です。私たちは居心地の悪い空間で、不気味な出来事に出会っているのかもしれませんが。しかし私たちは、しっかりと目を覚ましています。先端的な芸術表現と対話できる自由を、しっかりと噛み締めています。神戸市、兵庫県の寛大さに深く感謝いたします。そして、このプロジェクトを物心両面から支えてくださっている多くの企業・市民、ボランティアスタッフに、心から御礼申し上げます。

加川さんの「フクシマ」、それは私にはキリストの磔刑図のように見えます。原子炉を覆っていた建屋が破碎し、そこから出現した壮絶な光景。それはイエスが十字架に架けられたゴルゴタの丘のようです。しかしこの十字架にはイエスの肉体がない。私たちは原子力を神のように崇拝して高度経済成長の恩恵に浴してきました。しかし、その結末はどうだったか。メルトダウンから出現してきたのはキリスト不在の十字架だったのです。ここに復活の予告、救済の約束は見いだせるのでしょうか。同じく放射能汚染の実態も目に見えないもの、つまり透明であるだけに、私たちの先行きは一層不透明なのです。

だからこそ私たちは、アートを通して問い続けなければならない。というのもアートは、ともに生きるための技法なのだから。アートやアルスやクンストは、つい 200 年前までは技術一般を意味していました。しかし急速な近代化、産業化によって、よりよく生きるための技法は、科学技術だけに偏ってしまった。そして先進国日本において、メルトダウンによって科学技術の神話は崩壊したのです。

しかし私たちにはまだ希望があります。もう一つの技術、つまり芸術が、テクノロジーへの呪縛から、私たちの意識を解放してくれるという希望です。加川さんの「フクシマ」は、その意味で人類への福音なのです。ここから私たちは、技術との自由な関係を取り戻すことができます。そして日本と世界の 50 年後に向けて、その新しい価値を発信できるのではないのでしょうか。

これから 10 日間にわたって、この KIITO を舞台に様々なパフォーマンスと対話が繰り広げられます。それぞれかけがえのない美的表現が、そして自由な討議が、人間と技術との自由な関係を先取りする総合芸術へと高まっていくでしょう。私たちの誰もがそれに参加したいと思います。加川さん、ありがとう。

加川広重巨大絵画が繋ぐ東北と神戸プロジェクト実行委員長
藤野一夫

2015 年 1 月 10 日 オープニングセレモニーにて

実行委員会

委員長	藤野一夫	神戸大学大学院国際文化学研究科 教授
委員	齋藤光國	神戸市立灘区民ホール 館長
委員	大谷 燠	NPO 法人 DANCE BOX 代表
委員	島田 誠	アート・サポート・センター神戸 代表
委員	竹内利江	神戸学院大学 講師
委員	本田 亙	神戸市企画調整局デザイン都市推進室

事務局

事務局長	中井明子
事務局	島田容子
事務局	橋本みなみ
事務局	藤埴智史
事務局	猪子大地
事務局	岡野亜紀子
WEB デザイン	林 正樹
印刷物デザイン	林 淳子
印刷物デザイン	増井陽子
音響スタッフ	出口千寿
記録映像	山口順二

ボランティアスタッフ

三宅洸太郎 岡本知佳 岡元ひかる 楊帆 李威瑩 池田美季子 吉田咲子 山下喜代子
仙波康男 久保毅 小原純子 小野村敏文 三田宏美 木村香耶 本吉孝光 藤澤弘明
劉雨陽 内林加奈 中村慶仁 石坂将一 井本洋 森匠 濱崎祥博 近藤のぞみ 八木昇
川本昭男 西村美咲 中井信輔 山本裕也 松野潔高 井原麗奈 任清 世良典子 菅井美帆
平野義昌 久家恵一 長町佳子 上住伸子 平井孝佳 村本誠 堀井和由 西澤ゆう子 三
窪涼子 花井正子 衣笠収 重松由子 酒井じゅりこ 丸山福子 堀谷豊美 宮本裕也
早津和輝 岸本達智

主催：加川広重巨大絵画が繋ぐ東北と神戸プロジェクト実行委員会

共催： 神戸市、アート・サポート・センター神戸

助成： 兵庫県

特別協賛：株式会社シスメックス

協賛： UCC 上島珈琲株式会社、株式会社ロック・フィールド、株式会社本家かまどや
株式会社串乃家、株式会社新保哲也アトリエ、生活協同組合コープこうべ
大和ハウス工業株式会社、近畿労働金庫、株式会社フェリシモ
株式会社神戸風月堂、株式会社中村経営、和田興産株式会社、株式会社クサカベ
大光電機株式会社

後援： 一般財団法人音楽の力による復興センター・東北

一般財団法人アーツエイド東北

NHK 神戸放送局

特別協力：加川広重

公益社団法人全国公立文化施設協会、文化芸術による復興推進コンソーシアム

公益財団法人中内力コンベンション振興財団

公益財団法人神戸文化支援基金

THE STRiPES

協力： デザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO)

神戸市立灘区民ホール

神戸大学大学院国際文化学研究所

NPO 法人 DANCE BOX

企画ごとにご協力いただいている団体

【映画関係】

大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館（特別協力）

大阪ドイツ文化センター（特別協力）

株式会社くとうてん、神戸映画サークル協議会、神戸映画資料館、

NPO 法人神戸 100 年映画祭、野田北部まちづくり協議会、港まち神戸を愛する会、

一般社団法人元町映画館

【建築・まちづくり関係】

一般社団法人 ISHINOMAKI2.0、NPO 法人エフエムわいわい、

NPO 法人神戸まちづくり研究所、NPO 法人ココルーム、神戸復興塾、

タトアーキテクト/島田陽建築設計事務所、日建設計ボランティア部、

東日本大震災における建築家による復興支援〈アーキエイド〉、被災地市民交流会、

NPO 法人 まち・コミュニケーション

【コンサート関係】

The International Supporting Group for MAKOTO, Marimba, Mind、

関西トロンボーン協会、神戸芝居カーニバル実行委員会、株式会社斎藤楽器製作所、

NPO 法人しみん基金・こうべ、兵庫県子ども文化振興協会、

復興支援コンサート実行委員会、リッツ・ミュージック

【能】

公益財団法人有斐斎弘道館

【光のインスタレーション】

NPO 法人アーツプロジェクト

事業報告

- 期間** 2015 年 1 月 10 日（土）～18 日（日） 8 日間
*1 月 13 日（火）休館日は除く。
- 会場** デザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）
〒651-0082 神戸市中央区小野浜町 1-4
開館時間：11:00～19:00（最終日は 17:00 まで）
1 月 17 日（土）は 5：46～19：00 まで
TEL：078-325-2201 FAX：078-325-2230 Email：info@kiito.jp
- 入場料** 無料
- 入場者数** 延べ約 5000 人
- 募金** 総額 325,508 円 会場受付と映画上映会場へ募金箱を設置
すべてアーツエイド東北へ寄付

絵画展示 加川広重巨大絵画―フクシマ

作品「フクシマ」について

福島第一原発の近くで人の気配のない街を歩き、津波の被害そのままの状態に雑草に覆われる車や船を見、生まれ育った故郷を追われた方の怒りをお聞きして私の中に生まれた想いをこの絵にぶつけました。

〈加川広重〉



展示作品 宮本佳明「福島第一原発神社」

事故を起こした原子炉建屋にアイコンとなる和風屋根を載せ、原子炉を鎮め、神社ないしは廟（マウソレウム）として丁重に祀るというプロジェクトである。その目的は、今後1万年以上にわたって溶融燃料を含む高レベル放射性廃棄物を現状のまま水棺化して安全に保管することにある。なぜなら 200 トン近い溶融燃料をすべて回収することも、それにともない発生する大量の高レベル放射性廃棄物を場外搬出することも事実上不可能だからである。いつか廃炉を諦めた時、最も重要なことは「それ」が危険であるということを明示し続けることである。しかも、文化や言語さえも変わっているであろう1万年以上後の人類（それは日本人なのか？）に対してである。危険なものを危険であると知らしめること、それもまた建築の大切な役割である。原子炉を収める覆屋は「建屋」と呼ばれた。そもそも建築でさえなかった。ここではその役割を巨大な和風屋根に託している。



「失われた街」模型復元プロジェクト

震災によって失われた街や村を 1/500 の縮尺模型で復元し、地域に育まれてきた街並みや環境、人々の暮らしの中で紡がれてきた記憶を保存・継承していくプロジェクトです。地域の皆さんとともに、復元模型にそれぞれの想い、記憶を付加していくそのプロセス自体が街へ・自らへの追悼となり、街の再生へ向けての第一歩となっていることが分かり、活動を続けています。



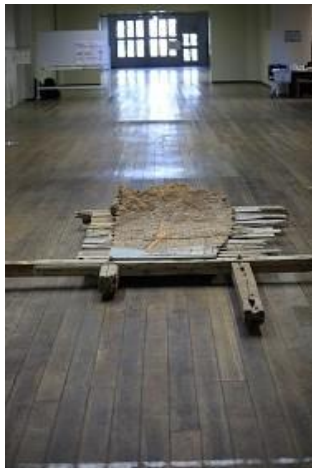
「Tohoku – Lost, Left, Found」 山岸剛写真展

2011年3月11日以降、東北地方太平洋沿岸部に季節が変わるごとに足を運び、撮影をくり返しています。おもに岩手、宮城そして福島の、いわゆる被災地にかぎらない東北の大地で、自然と人工性との力関係を記録しつつ、四年目。いまだ進行中の未曾有の災厄による、差し迫った東北の「現在」を、東北の「現実」を大型カメラを使った写真によって可能なかぎり簡明に、直接的かつ即物的に「報告」する試みです。



宮本佳明「芦屋川左岸堆積体」

仁川、夙川、芦屋川、住吉川、石屋川といくつもの天井川を越えて、西へ西へと理由もなく自転車のペダルをこいだ。見慣れた風景は壊れていても、残された土手をひとつ越えるたびに、肉体の苦痛と同時に安らぎに似た感覚があった。地震で六甲山は13cm高くなったという。天井川も造山運動の遠い結果だ。震災や水害という避けようのない自然災害の上で生きてきた私たちの歴史を、地形という形で伝えられないものか。芦屋市内で発生した瓦礫のうちコンクリート、土といった安定した材料の全量を、芦屋川左岸沿いに2.5kmにわたって積み上げ、六甲山から海へと連なる抑揚のある土手状の地形をつくろうと考えた。一般に自然災害の経験は、ただ防災機能の強化へと向かい、結局は忘却されてしまうことが多い。これはそういった負の記憶に地形という具体的な形態を与えることで、日常の身体性や風景の中に顕在化させる試みである。



「いいたてミュージアムーまでの未来へ記憶と物語プロジェクト」

いいたてミュージアムとは、飯舘村のこと、飯舘村に起こったことを県外に広く発信し、未来の世代へも伝えていこうというプロジェクトです。村民のみなさまのお宅へお伺いし、みなさんにとっての「古いモノ」「大事なモノ」「歴史的なモノ」を見せていただき、それにまつわるお話を集めてきました。「モノ」にまつわるお話から見えてきたのは震災前の豊かな村の姿でした。



光のインスタレーション「光の刻」

この作品に現れる手は、母となった私の友人と彼女の4ヶ月になる赤ん坊の手だ。今まさに触れ合わんとする大小二つの手は、その前に垂らされた裸電球の点滅によって、ゆっくりと立ち現れては消えることを繰り返す。

この作品が出来上がる数ヶ月前に、私は母を亡くした。年老いた母が病を得、心身共に衰え、知的好奇心も持ち前の社交性もすっかり失い、ただただベッドの上で死の恐怖に怯える姿を見続けるのは、娘の私にとっては、辛い数年間だった。彼女の臨終の際に私はベッドサイドに付き添っていたが、血中の酸素濃度が低くなり、あの世に旅立った時には悲しみよりもまず先に、正直これで母もやっと楽になれたという安堵感に包まれた。かと言って母を喪った哀しみは、中年にもなる私でさえ、心に大きな穴を空ける。ましてや思いもかけぬ災害によって突然肉親や友人を奪われた人たちの驚きや哀しみ、憤り、喪失感は如何ばかりだろう。勿論感情面ばかりではなく、災害は多くの人々の人生を大きく覆す。話を作品に戻そう。母を亡くして喪失感の只中にいた私を唯一救ってくれたのが、友人が子どもを産んだことだった。そこに「命の連鎖」を見た。母という個人は亡くなったが、また新しい命が芽生えた。命そのものは決して途切れることなく連綿と続いてゆくことを肌で感じ、それを作品にした。こんなにシンプルなことを、こんなにシンプルに伝えた作品を初めて作った。阪神大震災の後、アーティストとして何もできず無力感に苛まれたこの私が、今東北の人々にささやかな何かを伝えることができるとしたら、神様にお礼を言いたい。



被災地（東北）から被災地外の皆さんに読んで欲しい本 90 選

東日本大震災に関する、いわゆる「震災関連本」が世に溢れました。地震の本、津波の本、そして原発事故の本と、空恐ろしくなるほどおびただしい数の「震災関連本」が、本屋さんの棚を埋め尽くしました。あるデータによると震災後2年間で出版された「震災関連本」はおよそ2300冊とあります。「ひとつのテーマの出版ラッシュとしては史上空前」ともいわれましたが、さらに2年を過ぎて3000冊をはるかに超えているのではないのでしょうか。そんな「震災関連本」の奔流の中であって、被災3県（岩手・宮城・福島）の地域出版社は、本の力でどのように東日本大震災に立ち向かってきたか。どのように発信してきたか。被災地で出版された本を手にとって実際にご覧いただき、それを感じ取っていただければと、神戸に本をお送りします。【荒蝦夷／河北新報出版センター／東北大学出版会／プレスアート／盛岡・さわや書店／仙台・金港堂／福島・西沢書店】



平田達哉「あなたの記憶に灯をともし」

この立体作品は見る位置によって繁栄と墓標の両面の見かたができます。鉛でできた家に封印された文明の記憶（内部に装飾やエンタシス柱が描かれている）。かつての家の住人を待ち焦がれるかのようにLEDライトが点滅していて、灯火のゆらぎはあたかもそこに住んでいた人間の記憶のなごりにも見えます。各種放射線から鉛で保護された家（記憶装置）はLEDライトの点滅とともに半永久的に残ります。 繁栄と終末・人の不在を暗示することによって、人間の記憶と、それをこれから引き継がなければならない未来への時間を表現しています。



復興カメラ（大槌町定点観測）

東日本大震災の風化防止や、ふるさとへの想い・教訓を次世代へ継承していくための「復興カメラ」。岩手県釜石市・大槌町を中心に、震災直後から撮りためてきた写真を通して見えてくるまちの様子や変化、私たちの歩みを知ってほしい。「日々刻々と変化し続ける、ふるさと。今日のこの景色は、今日しか見ることができない。」



みんなの写真展～相双地域のいま～（認定 NPO 法人フロンティア南相馬）

2011 年 3 月 11 日。東日本大震災があったあの日から、南相馬に生きる人がなにを見て、なにを想い、いかにしてそれぞれの日々を過ごしてきたのか。南相馬に暮らす人々の目線で切り取り、言葉を記し、発信したい。そんな想いとともにスタートした「みんなの写真展」が 2 年目を迎えます。今年のテーマは、「相双地区のいま」。南相馬はもちろん、相馬、富岡へとエリアを拡大することで、より多くの人々が捉えた「相双地域のいま」を見つめようと考えました。

あれからまもなく 4 年。復興に向けて少しずつ歩みを進めていく中、いまだに許可を得なくては入れない場所があります。それでも、さまざまな想いを胸に抱いたまま、この地域とともに生きようとしている人がいます。そんな事実を伝えるために。



シンポジウム・パフォーマンス プログラム

1月10日(土)

13:00 「A SONG FOR JAPAN」プロジェクト

演奏：トロンボーンアンサンブル(呉信一と仲間たち)

本プロジェクトは、東日本大震災後すぐに海外の日本人トロンボーン奏者たち、および日本人メンバーを含み日本とゆかりのある海外のトロンボーン・グループが協力して立ち上げました。ベルギーのオーケストラのトロンボーン奏者のスティーブン・フェルヘルスト氏が「A SONG FOR JAPAN」を作曲し、著作権フリー、アレンジフリー、日本と東北のために演奏を捧げましょう、また YouTube へアップして活動を広げるプロジェクトとして、ベルリンフィルのトロンボーン奏者をはじめ、さまざまなジャンルのプレイヤーの演奏がHP でお聴きいただけます。東日本大震災の被災地の人々が元の平和な生活を送れるまで、世界中からエールを送り続けるプロジェクトとして日々更新されています。<http://asfj.sblo.jp/>

当日の演奏も YouTube へアップしプロジェクトへ参加しました。

https://www.youtube.com/watch?v=uSw0JX_00yY



「出来事から」(舞踏)

出演：森繁哉、松村知紗

山形から舞踏としての新たな民俗の身体様式をつくりだした森繁哉さんと松村知紗さんをお招きして、この場のための新作「出来事から」を踊っていただきました。



14:00 「ボレロ」

出演：貞松・浜田バレエ団

フランスの作曲家ラヴェルのこの作品は、単調なメロディーの繰り返しでありながら、とても魅力的に「小」から「多」へ、音量と楽器が増していきます。それに合わせて踊りも1人から3人、4人、9人へと人数を増やしていきます。最後には舞台全体に広がり、そのエネルギーは結集していきます。



15:00 「いいたてミュージアム」までの未来へ記憶と物語プロジェクト トーク

出演：菅野宗夫（飯館村農業委員会会長） 聞き手：石田圭子、島田誠

飯館村が置かれている現実をお話いただき、ミュージアムという記憶保存装置としてどのようにイメージされているのかをお伺いしました。

そして神戸では「小さな声」はどう伝えられ保存されてきたのか。「震災の街・アーカイブ」を主宰されてきた季村敏夫さんのグループも交えながら、学びあいました。その中からいいたてミュージアムのビジョンが補強され、私たちが協力、志縁できることが見えてくればうれしいと思います。



16:00 「ライフ」(ダンス)

出演：Ensemble Sonne

長田で活動する NPO 法人 DANCE BOX より Ensemble Sonne に出演して頂きました。雨音と傘のシーンから始まりやがて晴れていき華やかな蝶が舞うようなパフォーマンスは日本の未来を表しているようにも感じられました。



17:30 森口ゆたか 光のインスタレーション「光の刻」 作家トーク

聞き手：島田誠

このインスタレーションを是非、東北の被災された皆様に見ていただきたいと願ってきましたが実現の機会を持てませんでした。今回、このプロジェクトで発表できたことをうれしく思います。



1月11日（日）

11:00 被災地（東北）から被災地外の皆さんに読んで欲しい本 90 選 解説



12:00 「Tohoku - Lost, Left, Found」 山岸剛写真展 ギャラリートーク



13:00 被災地発 未来へ拓く街づくり（トークセッション）

トーク：松村豪太（石巻）、上田假奈代（西成）、吉富志津代（長田）

モデレーター：藤野一夫

東日本大震災は、超少子高齢化社会の未来を一瞬にして先取りした。東北地方の人口流失は一気に加速。壊滅した街とコミュニティの再生は、日本の将来そのものの課題だ。文化面での震災復興や格差化するコミュニティにおける社会包摂に取組むエキスパートが「未来へ拓く街づくり」を語っていただきました。



15:30 「震災に向き合う表現 一大地と記憶ー」(シンポジウム)

パネリスト：五十嵐太郎、宮本佳明、山内宏泰

モデレーター 梶橋修

大災害によって傷ついた社会において建築、美術になにが可能か。震災に向き合う表現の可能性について語って頂きました。



1月12日(月・祝)

12:30 「逃げ地図ワークショップーリスクから考える街づくりー」

講師：羽鳥達也、谷口景一郎(日建設計ボランティア部)

参加者：11名(公募)

逃げ地図は、避難時間や津波で浸水しやすい範囲など、普段目に見えない地域のリスクを視覚化することで、地域の皆さんと街づくりの基礎となるそうした事実を、具体的に共有することができる地図です。ワークショップでは避難ビルを指定するかしらないか、近道を設けるか設けないかなど、いくつかの施策を比較し、その有効性を確かめることもできます。



15:00 「震災と向き合うデザイン ―建築家たちの挑戦―」（トークセッション）

トーク：塚本由晴、西田司、槻橋修

モデレーター：家成俊勝

東日本大震災後、被災地に寄り添い再生の道を探る建築家たちの活動は、従来の建築デザインの枠を超えて、コミュニティや場のデザイン、地域との共働、ジャンルを越えたコラボレーションなど、多面的な様相を呈しています。被災地での新しい挑戦は被災地に、そして日本にいかなる未来を切り開くのか、話し合いました。



1月16日（金）

18:00 世界初演曲による献奏

加川広重「フクシマ」のある KIITO の空間、阪神淡路大震災からの 20 年、東北大震災からの 4 年。

5 人の作曲家がこの場のために捧げる初演曲を含むプログラムを 4 つのステージで被災されたみなさま、いまなお困難を抱えるみなさまへの祈りをこめて献奏しました。

河合拓始（作曲、ピアノ）

早坂文雄「室内のためのピアノ小品集」（1941）より

藤枝守「レクイエム・フラグメントウム」（1988）より

河合拓始「イなりうたによる献奏曲（仮題）」（2015 初演）



高橋侑子作曲 ソプラノ／松岡万希 ピアノ／高橋侑子
高橋侑子／和合亮一（福島在住の詩人）の詩による歌曲（世界初演曲含む）



脇山幹士作曲 フルート／吉岡美恵子 ピアノ／脇山幹士
中川いづみ／ソプラノフルートとピアノのための「対話」より I. 翁との対話
福島和夫／独奏フルートのための＜冥＞
脇山幹士／ A Musical Triptych for Resilience for Flute and Piano
--- dedicated to the victims and survivors of the Great East Japan
Earthquake on the occasion of the 20th anniversary of the Great
Hanshin Earthquake （世界初演）



江藤誠仁右衛門、イトウユミ作曲

ヴァイオリン／マウロ・イウラート ピアノ／伊藤ルミ

J・ベンダ／グラーベ

イトウ ユミ／「東北三県に寄せて〜3つの民謡より」新作初演

江藤 誠仁右衛門／ヴァイオリンとピアノのための「種は眠る」新作初演



1月17日（土）

8:00 追悼能「翁 日吉式」

出演：翁 上田貴弘 千歳 林宗一郎

笛 赤井要佑 小鼓 大倉源次郎 上田敦史 清水和音

六百年以上もの間、平和を祈り続けてきた芸能・能楽。なかでも「翁」は、天下泰平と国土安穏を祈り、未来を寿ぐ曲。能楽以前の古い形を残しているとも言われ、とくに大切に伝えられてきました。私たちにとって忘れてはならない大事な日に、私たち日本人が大切に伝え続けてきた能楽という芸能を通して、ともに祈りを捧げることができました。



11:00 加川広重 巨大絵画の読み解きとプロジェクトの意味（トークセッション）

トーク：加川広重、藤野一夫、島田誠

3.11 のカストロフィと向かい合った巨大絵画から、一つの総合芸術のプロジェクトが誕生した。一枚の絵画が、大震災で破壊された東北と神戸を結びつけ、再生へ向けた市民社会の連帯を育んできた。現代芸術には社会を変える力がある。だから私たちは、加川広重の巨大絵画について、美学的に語るだけでは十分ではない。巨大絵画を読み解きながら、本プロジェクトの仕掛けと意味についてディープに語り合いました。



14:00 坂茂 記念講演

講演：坂茂

の阪神・淡路大震災後の仮設住宅や教会の集会所を特殊加工された「紙(紙管)」で制作。国内外で起きた地震の被災地を支援、東日本大震災では避難所に紙パイプと布を使いプライバシーを確保する提案を行ったことなど語って頂きました。



16:00 「宮本佳明 加川広重 による作品解説」

ホールに展示されている作品について、それぞれの作者より解説しました。



18:00 竹下景子「神戸への思い、東北への思い 一朗読とお話」

朗読：竹下景子 お話：竹下景子、加川広重、島田誠

竹下景子さんは阪神淡路大震災からの復興を願う復興支援コンサートに 1999 年から「竹下景子・詩の朗読と音楽の夕べ」として出演され、2012 年から東北（仙台）での「かたりつぎ 詩の朗読と音楽の夕べ」に引き継がれました。20 年の節目となる日に神戸への思いを島田誠と、東北への思いを加川広重さんと、詩の朗読を交えながら語っていただきました。



1月18日（日）

14:00 追悼コンサート

出演：バッハクライス神戸（合唱およびオーケストラ）

指揮／ヴィオラ独奏 李 善銘

曲目

J.S.バッハ：「主よ人の望みの喜びよ」

モーツァルト：「アヴェ・ヴェルム・コルプス」

アルカデルト：「アヴェ・マリア（アカペラ）」

ほか



16:00 追悼演奏

出演：名倉誠人（ヴィブラフォン）

世界最大のヴィブラフォンを使用し、バッハを奏でいただきました。。

（楽器提供：斉藤楽器製作所）

曲目

J.S.バッハ：無伴奏パルティータ第2番二短調 BWV1004



東北と神戸を繋ぐドキュメンタリー映画上映会 2階ワークショップスペース 1

1月12日(月・祝)

◆榛葉 健監督作品

11:30 『うたごころ』(1時間 52 分)

13:25 榛葉監督 講演(20 分)

15:00 『with…若き女性美術作家の生涯』(60 分)

16:00 榛葉監督 講演(30 分)



1月15日(木)

◆青池 憲司監督作品

13:00 『阪神大震災 再生の日々を生きる』(2 時間 36 分)
(記憶のための連作『野田北部・鷹取の人びと』全 14 部の集成篇)

16:00 青池監督 講演(45 分)
ゲストスピーカー 野田北部まちづくり協議会事務局長 河合節二

17:00 『3 月 11 日を生きて 石巻・門脇小・人びと・ことば』(1 時間 37 分)



1月16日(金)

◆ドイツとフクシマを繋いで

16:00 『シェーナウの想い～自然エネルギー社会を子どもたちに～』(60分)

17:00 トークセッション(1時間15分)

「ドイツのエネルギー政策を考える」

大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館

副総領事 フローリアン・イエーガー

立命館大学経営学部教授 ラウパツハ・スミヤ ヨーク

コーディネーター

神戸大学大学院国際文化科学研究科教授 藤野一夫

18:30 『アンダー・コントロール』(1時間38分)



1月18日(日)

◆酒井耕・濱口竜介監督作品

11:30 『なみのこえ 新地町』(1時間43分)

13:15 濱口監督 講演(20分)

13:50 『うたうひと』(2時間)



関連企画 展示

「神戸発・楽しみながら学ぶボウサイ」展示会

10日（土）12:45～

「みちのく談話室」1月定例会 10日（土）12:45～

10日（土）13:30～

「被災地におけるローカル・コモンズの再生～岩手県大槌町における復興過程から～」(シンポジウム)

18日（日）11:00～

いわきこうべ若者架け橋プロジェクト ミーティング